こんな取組です

熊本県教育委員会　地域学校協働活動モデル地域指定事業（宇城教育事務所管内）
美里町におけるコミュニティ・スクールと地域学校協働活動の一体的な推進

美里町教育委員会	●目指す子供の姿	●身に付けさせたい子供の力
	美里を愛し、夢を持ち、社会の変化にも柔軟に対応できる子供	◆自己肯定感　◆対話力　◆郷土愛

学校や地域の課題	①学校：純朴で素直な児童・生徒が多いが、小集団の学校生活の環境であり、切磋琢磨が不足している。経験や体験が限られているので、成功体験が少なく自己肯定感がやや低い傾向にある。 ②地域：人口の減少が最大の課題であるが、地域の教育力を学校に提供する機会が少ないため、子供と地域の方と交流する機会も少ない。小さい町であるが、生きがいのある活気に満ちた地域づくりが必要である。

● 取組の概要・特徴や工夫

◇　取組の概要
　美里町では、令和2年度に計画・準備を経て、令和3年度からスタートさせた。コミュニティ・スクールと地域学校協働活動を一体的に推進するため4つの組織を構成した。①学校運営協議会　②地域学校協働本部運営委員会　③コーディネート会議　④学校支援の会である。この4つの組織が有機的に動くことで、一体的な推進ができると考える。学校からの要請に応じて、地域学校協働本部が動くシステムである。
◇　特徴や工夫
　学校運営協議会は年5回開催している。第1回と第5回は中学校区（小中合同）、第2～4回は各学校単位で開催している。美里町学校運営協議会規則19条では、「承認・意見・任用」の3つの機能の範囲を明確にしている。
　コーディネート会議を年8回開催し、地域学校協働活動推進員の「同一歩調」を大切にしている。また、**学校支援の会**を年2回開催し、学校支援者の交流や緩やかなネットワークづくりを目指している。
　地域学校協働本部運営委員会を年2回開催している。美里町では、2つの地域学校協働本部を設置しているため、地域学校協働本部運営委員会が統括的で司令塔の役割を果たしている。

● 取組の実際

○　**地域学校協働活動「ふるさとCMづくり」**
令和５～７年度の３年間、KAB熊本朝日放送と教育連携協定を結び「ふるさとの魅力を発信するCMづくり」に取り組んでいる。

○　**学校運営協議会「課題を共有し、解決のために実働する」**
○　**学校支援の会「実践発表及び交流・ネットワークづくり」**
○　**コーディネート会議**
「地域学校協働活動推進員の会議　年8回」

● 地域学校協働活動における効果・成果

〇一体的な推進
・学校教育課籍の総合教育アドバイザーが社会教育課で勤務しているので、学校教育課と社会教育課が連携・協働するには、効果的である。総合教育アドバイザーが、行政側の一体的な推進のコーディネート役を果たしている。
・一体的な推進をするために、4つの組織①学校運営協議会　②地域学校協働本部運営委員会　③コーディネート会議　④学校支援の会を構成している。地域学校協働活動推進員がすべての組織に所属し、4つの組織のパイプ役を担っている。
・令和5年度の地域学校協働活動数は、5校で154回と年々量・質ともに向上している。令和6年度も150回以上の実施が見込まれる。特に、「ふるさとCMづくり」は、中学生の発想力・企画力・人間味溢れるユーモア等、生徒のパワーを感じる作品となった。
〇人材育成
・学校支援ボランティア登録者が120人にのぼり、人材バンクとして登録している。人材育成より、地域学校協働活動推進員による人材発掘に力を注いでいる。学校への支援体制は、十分整ってきた。
・町のイベントへ中学生が積極的にボランティアとして活動している。小・中学生も地域の一員として、地域貢献する機会は増えている。また、地域の方との交流の機会になり、コミュニケーション力を培うことができている。
〇学校や地域が抱える課題の解決
・学校からは、地域学校協働活動を積極的に取り組むことで、「催しやイベントのボランティア経験や体験を通して、地域の方との対話する力が身につき、自己肯定感が向上してきた。」「担任や担当が代わっても、持続的な取組ができる。」等の声がある。
・地域からは、「児童・生徒と共に学ぶ機会ができ、児童・生徒から元気やエネルギーがもらえる。」「児童・生徒のしっかりとした考え、ふるさとを思う気持ちや行動に触れ、感動する。」等の声が多い。